



Title	ゲルマン語の歴史と構造 (2) : ゲルマン祖語の特徴 (1)
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 134, 31(左)-67(左)
Issue Date	2011-07-20
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46862">http://hdl.handle.net/2115/46862</a>
Type	bulletin (article)
File Information	ARSC134-0003.pdf



[Instructions for use](#)

## ゲルマン語の歴史と構造 (2)

### — ゲルマン祖語の特徴 (1) —

清 水 誠

Structure and Development of the Germanic Languages (2)

— General Characteristics of Proto-Germanic (1) —

(*The Annual Report on Cultural Science* No. 132. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2011. ISSN1346-0277)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@lit.let.hokudai.ac.jp)

### III. 歴史的に探るゲルマン語

#### 1. ゲルマン語とゲルマン人 — 先史時代からローマ帝国期まで

##### 1.1. ゲルマン語の起源 — 先史時代の移住と接触

ここからはゲルマン語の歴史的発達をたどることにしよう。その話者の祖先はいったい何者で、どこに住んでいたのだろうか。古代世界の版図を把握するには、当時の人々の生活基盤で、防衛的にも重要だった河川の位置関係に注目すると便利である。ゲルマン人の源郷は、北ドイツからスカンジナビア南部にかけての一带だった。紀元前 1000 年頃には、同地で広範囲に定住していたと考古学的に推定されている。くわしくいうと、北ドイツの古都ブレーメン (ド Bremen) を流れるヴェーザー川 (ド Weser) 河口から、ドイツとポーランドの国境を形成するオーダー川 (ド Oder, ポ Odra 「オドラ川」) 下流までのバルト海南岸である。これにはシュレースヴィヒ (ド

Schleswig), ホルシュタイン(ド Holstein), メークレンブルク(ド Mecklenburg) という北ドイツの各地方, デンマーク, それに対岸のスカンジナビア半島南部が含まれる。

前述のクルガン文化の担い手と推定される印欧語族の牧畜民は, はるか南東の内陸部から騎馬と車を操り, 縄文土器を携え, 戦斧<sup>せんぶ</sup>をかざしながら, およその推定で紀元前 2000 年頃までにこの地に到達したと考えられている。そこには, 巨石墳墓文化圏を形成していた非印欧語族と推定される多数派の農漁業民族が暮らしていた。印欧語族の牧畜民はその人々を紀元前 1200 年頃までに言語的に同化して, ゲルマン人の祖先となつたらしい。かつてナチスはゲルマン民族とその故地こそが印欧語族の直系であり, 源郷であるとして, 「インド・ゲルマン語族」(ド Indogermanisch) の名称を好んで用いた<sup>1</sup>。しかし, 金髪, 長身, 碧眼に象徴される純血のゲルマン民族のイメージは, 現在では完全に否定されている。

非印欧語族の人々との混交によって誕生したゲルマン人が用いていたゲルマン祖語の基礎語彙は, じつにその 3 分の 1 が印欧語以外の言語を起源とするといわれている。それには社会制度(knight「騎士」, thief「泥棒」, ド Adel「貴族」), 軍事・戦闘(sword「刀」, bow「弓」, ド Krieg「戦争」) 以外に, 航海・魚類(sea「海」, ship「船」, keel「竜骨」, eel「うなぎ」と農耕・家畜(plow「犁」<sup>すき</sup>, lamb「子羊」, ド Hafer「カラスムギ」)にかんする語彙が含まれている<sup>2</sup>。これは印欧語族にとって, おそらく縁遠い生活習慣だったのである。

ゲルマン人は推定で紀元前 500 年頃に, 西はライン川を越えて現在のオランダ語圏に達し, 東はポーランドの首都ワルシャワを流れるヴィスワ川(ポ Wisła, ド Weichsel「ヴァイクセル川」)までの低地の平原地帯, 北はスウェーデン中部とノルウェー南部に及んでいた。その頃までには, ゲルマン祖語の分岐が完了していたと推定されている。

<sup>1</sup> 現在でもこの名称を用いることがあるが, ナチズムとは関係がない。

<sup>2</sup> Hawkins (1987: 74 f.), König (1998<sup>12</sup>: 43), Ramat (1998: 381) 参照。

当時のゲルマン語は、北は非印欧語族のバルト・フィン諸語、南と西はケルト諸語、東はバルト諸語に接し、相互に借用が行われた痕跡が残っている。その中には祖語の再建に重要なものもある。たとえば、バルト・フィン諸語に属するフィンランド語の *kuningas* 「王」はゲルマン語からの借用語だが、語末音の摩滅を免れて、ゲルマン祖語 \**kuningaz* の語幹形成接尾辞と呼ばれる *-a-* と単数主格語尾 *-s* (> *-z*) を保っている。現代語ではアイスランド語の単数主格 *konungur* (<古ノ *konungr*) の *-r* (< *-z* < *-s*) と複数主格 *konungar* の *-a-* などに残っているにすぎない。類例にはフィンランド語の *rengas* 「輪、指輪」(ゲ \**xrengaz*, 英 *ring*)、*lammas* 「子羊」(ゲ \**lambaz*, *-iz*, 英 *lamb*) などがある。一方、周辺言語がゲルマン語に与えた影響も少なくなかったとされている。語彙の借用以外にも、印欧祖語から袂を分かつた語頭アクセントへの固定、ウムラウト、ゲルマン語子音推移などのゲルマン祖語の特徴は、バルト・フィン諸語の影響で生じたとする急進的な意見もある<sup>3</sup>。

## 1.2. ローマ帝国期の版図——「ゲルマン」という名称をめぐる

ケルト人などを圧迫して内陸部に南下したゲルマン人の言語は、すでにはなかつたと考えられている。ゲルマン祖語が明確な分岐を開始したと推定される紀元前後には、ほぼライン川 (ド Rhein) とドナウ川 (ドーナウ川, ド Donau) を結ぶ線でローマ帝国と相對していた。現在のスイスに源を発し、ドイツ西部、オランダ南部を南北に流れて北海に注ぐライン川と、南ドイツからオーストリアを東西に貫通して黒海に至るドナウ川は、ゲルマン人の居住地をローマ帝国から隔てる自然の境界を形成していた。このことは、ローマの歴史家タキトゥス (Tacitus 55 頃～116 頃) による『ゲルマニア』(ラ *Germania* 後 98) の冒頭に明記されている。

約 50 を数えたゲルマン人の部族国家「キークウィタース」(ラ *civitas*) は 10 余りの新しい部族に統合され、4 世紀半ばから 6 世紀半ば (375～568) の民族大移動でヨーロッパ広域とその周辺に一時的に大きく拡大した。「ゲルマ

<sup>3</sup> Wiik (1997) 参照。

ン」という名称は自称ではなく、語源もはっきりしない。この呼び名は『ガリア戦記』(ラ *De bello Gallico* 前 52～51)の著者ユリウス・カエサル(Julius Caesar 前 100～44)が初めて用いた。『ゲルマーニア』によれば、本来、ライン川を越えてローマ帝国領ガリア(現在のフランス)に侵入したラテン語で Germani「ゲルマーニー」という一部族をケルト人が指して呼んでいたのが、他の部族にも一般化されたという。

## 2. 印欧祖語からゲルマン祖語へ — 祖語の似顔絵を描いてみる

ゲルマン語最古の資料は、北ドイツ、シュレーズヴィヒ=ホルシュタイン州(ド Schleswig-Holstein)の古都メルドルフ(ド Meldorf)で、婦人の墓の埋葬品として1979年に確認された衣服の留め金に用いたブローチとされている。この『メルドルフのブローチ』(Meldorf Fibula)<sup>4</sup>には、ラテン文字に似た後述するルーン文字で、左から読むと hiwi, 右から読めば ipih のように刻まれている(p=th)。ルーン文字による銘文は200年頃にさかのぼるといわれるが、1世紀前半と推定されるこの出土品はその成立を百数十年早める可能性を含んでいる。この4文字は埋葬された婦人の名前とも解釈されているが、これだけではゲルマン祖語については何もわからない。文献が残っていないゲルマン祖語とは、どんな言語だったのだろう。印欧祖語からの分岐の過程で生じた次の一連の変化を通じて、およその輪郭が浮かび上がってくる。4世紀という最古のまとまった文献を伝えるゴート語を中心に、その姿を追ってみよう。

### 2.1. ゲルマン語子音推移またはグリムの法則 — 謎に満ちた音韻法則の代名詞

まず、子音から始めよう。ゲルマン語ははるか東方に位置するコーカサス地方のアルメニア語と並んで、紀元前3世紀頃までに閉鎖音系列の子音の特

---

<sup>4</sup> Düwel (2001<sup>3</sup>: 23 f.), Nielsen (2000: 280), Faarlund (2008: 218) 参照。

異な変化を被った<sup>5</sup>。これはデンマーク人のラスク (Rasmus K. Rask 1787 ~1832) が 1818 年に発見した有名な音韻法則で、「ゲルマン語子音推移」 (Germanic Consonant Shift) または「第一次子音推移」 (First Consonant Shift) という。ドイツ人のヤーコプ・グリムが 1822 年に理想化を交えて体系化したので、後述する「高地ドイツ語子音推移」と合わせて「グリムの法則」 (Grimm's law) とも呼ばれる。唇音、歯(茎)音、軟口蓋音、唇軟口蓋音の 4 種類の閉鎖音に起こった体系的な「ずれ」であり、3 系列の調音方法が摩擦音を含む別の「障害音」 (obstruent) に移行した<sup>6</sup>。

- I. 印欧：無声閉鎖音 (p/t/k/k<sup>w</sup>) > ゲ：無声摩擦音 (f/p/x/x<sup>w</sup>)  
 II. 印欧：有声閉鎖音 (b/d/g/g<sup>w</sup>) > ゲ：無声閉鎖音 (p/t/k/k<sup>w</sup>)  
 III. 印欧：有声有気閉鎖音 (b<sup>h</sup>/d<sup>h</sup>/g<sup>h</sup>/g<sup>wh</sup>) > ゲ：有声無気摩擦音 (b/ð/g/g<sup>w</sup>) (> 有声閉鎖音 (b/d/g/g<sup>w</sup>))

I. 印欧祖語	p	t	k (=c)	k <sup>w</sup> (=qu)
ゲルマン祖語	f	þ (=th)/θ/	x/x/	x <sup>w</sup> (=hw)/x <sup>w</sup> /
	(/φ/>/f/)	(>ch, h/x/, /h/)	(>hw/xw/, /hw/)	

ゲ \**fiskaz*<sup>7</sup> 「魚」 (英 fish), ゴ *fisks* < 印欧 \**peisk-*, ラ *piscis*  
 ゲ \**prejez* 「3」 (英 three), ゴ *þreis* < 印欧 \**treyes* < \**trei-*, ラ *trēs*  
 ゲ \**xertōn* 「心臓」 (英 heart), ゴ *haírtō* < 印欧 \**kerd-*, ラ *cor*

<sup>5</sup> 前稿 31 頁以下で述べた印欧 \*g<sup>w</sup>ōus > 英 cow/アル kov (印欧 g<sup>w</sup> > ゲ/アル k) の例を参照。印欧語各語派での閉鎖音の対応は、Watkins (1992<sup>3</sup>) とそれをもとにした寺澤 (編) (1997 : 1762), Mallory/Adams (2006 : 464f.) の一覧表を参照。

<sup>6</sup> /p<sup>h</sup>/ は「気音」 (aspiration, /<sup>h</sup>/) を伴った無声の「有気音」 (帯気音, aspirated), /φ/ は両唇無声摩擦音, /θ/ は唇歯無声摩擦音を表す。p > /φ/> /f/ と同様に, t > þ/θ/ の変化にも中間段階の両唇無声摩擦音があったと考えられる。Ringe (2006 : 94) 参照。推定形を表す「\*」は原則として語形だけにつけることにする。

<sup>7</sup> ゲルマン祖語の語形は Orell (2003) にほぼ準じて示す。以下同様。印欧祖語の語形は Watkins (1985<sup>2</sup>) とそれをもとにした寺澤 (編) (1997) に従って示す。したがって、ここではラリンガルを用いた表記にはしていない。

- ゲ \**x*<sup>w</sup>at「何」(英 what<sup>8</sup>), コ *ha*(=hwa) <印欧 \**k*<sup>w</sup>od-<\**k*<sup>w</sup>o-, ラ *quod*
- II. 印欧祖語            b     d     g     g<sup>w</sup>
- ゲルマン祖語        p     t     k     k<sup>w</sup> (=q)
- ゲ \**deupaz*「深い」(英 deep), コ *diups*<印欧 \**d<sup>h</sup>eub-*, リ (=リトアニア語) *dubūs*
- ゲ \**texun*「10」(英 ten), コ *taihun*<印欧 \**dek<sup>m</sup>*, ラ *decem*
- ゲ \**akraz*「耕地」(英 acre), コ *akrs*<印欧 \**agro-*, ラ *ager*
- ゲ \**k<sup>w</sup>emanan*「来る」(英 come), コ *qiman*<印欧 *g<sup>w</sup>ā-*, \**g<sup>w</sup>em-*, ラ *venire*

- III. 印欧祖語            b<sup>h</sup>                            d<sup>h</sup>                            g<sup>h</sup>                            g<sup>w</sup><sup>h</sup>
- ゲルマン祖語        ɸ /β<sup>9</sup>                            ɸ /ð/                            g/ɣ/                            g<sup>w</sup>/ɣ<sup>w</sup>/
- (>/v/>b/b/)                            (>d/d/)                            (>g/g/)                            (>g<sup>w</sup>/g<sup>w</sup>/)
- ゲ \**beranan*「運ぶ」(英 bear), コ (ga-) *baíran*<印欧 \**b<sup>h</sup>er-*, ラ *ferre*
- ゲ \**medjaz*「中間の」(英 mid), コ *midjis*<印欧 \**med<sup>h</sup>yo-*, ラ *medius*
- ゲ \**gastiz*「客」(英 guest), コ *gasts*<印欧 \**g<sup>h</sup>os-ti-*, ラ *hostis*「敵」
- ゲ \**senganan*「歌う」(英 sing), コ *sig<sup>g</sup>wan* (gg=ng)<印欧 \**seng<sup>w</sup>h-*

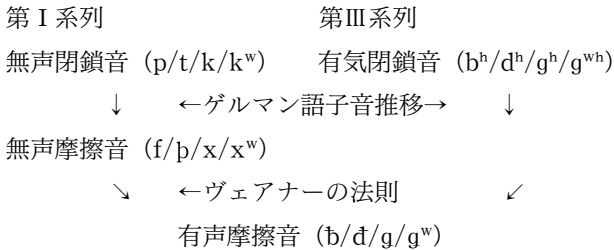
この表からは、英語の have とラテン語の habēre「持っている」は語形も意味もそっくりだが、語源が異なることがわかる。「所有」とは「授与」や「取得」を経た状態であり、habēre (ラ h/g<印欧 g<sup>h</sup>) は英語の give (<ゲ \**gebanan*<印欧 \**g<sup>h</sup>ab<sup>h</sup>-*), have (<ゲ \**xabēnan*) はラテン語の capere「つかむ」(<印欧 \**kap-*, 英 captive「捕虜」) と同源である。同じく、英語の day とラテン語の diēs「日」、英語の fire とフランス語の feu「火」も無関係である。逆に、英語の guest「客」とラテン語の hostis「敵」は見知らぬ者はどちらにもなると考えれば、同源と納得できよう。英語の linguistics「言語学」のもとになったラテン語の lingua「舌、言語」も、d>l という調音の強さが弱

<sup>8</sup> 英語では古英語の hw- の/h/の音が脱落して中英語で w- のつづりに変わり、ノルマン人の書記法の影響で h の文字を挿入して wh- となった。

<sup>9</sup> /β/ は両唇有声摩擦音、/v/ は唇歯有声摩擦音を表す。

まる「軟音化」(lenition)によって *dingua* にさかのぼり、英語の *tongue*「舌」と同源である。

じつは、第 I 系列の「無声閉鎖音 (p/t/k/k<sup>w</sup>) > 無声摩擦音 (f/p/x/x<sup>w</sup>)」の変化はこれで止まったわけではない。次に述べる「ヴェアナーの法則」の適用が阻害されない限り、「無声摩擦音 (f/p/x/x<sup>w</sup>) > 有声摩擦音 (b/d/g/g<sup>w</sup>)」の変化が続き、第 III 系列の「有気閉鎖音 (b<sup>h</sup>/d<sup>h</sup>/g<sup>h</sup>/g<sup>wh</sup>) > 有声摩擦音 (b/d/g/g<sup>w</sup>)」の結果と混じりあってしまった。



そのため、ゲルマン祖語では閉鎖音に比べて摩擦音が著しく多いという類型論的な不均衡が生じた。それを解消するように、「有声摩擦音 (b/d/g/g<sup>w</sup>) > 有声閉鎖音 (b/d/g/g<sup>w</sup>)」の変化が続いたとされている。ただし、起こった時点の確定は、カッコ内に「>」で示した他の変化と同様に困難である。ゴート語では b/B/>/v/>/b/ と d/ð/>/d/ の変化は語頭では起こっていたといわれているが、語中や語末でははっきりしない。bindan「結ぶ」の b は英語の bind と同じ /b/ だったらしいが、ラテン語の november「11月」は *naúbaímbair* と転写され、b の文字が v と b に対応している。一方、giban「与える」(英 give) の b は gaf「与えた」(英 gave) では「語末音 (= 音節末音) の無声化」(final devoicing) によって f と交替するので、/b/ とは別の /v/ だったかもしれず、両者は「異音」(allophone) とも解釈できる。ゴート文字が基礎としたギリシャ文字 β, δ, γ の発音も、有声閉鎖音 /b/, /d/, /g/ から摩擦音 /v/, /ð/, /ɣ/ に変わっていた。後述するように、ゴート文字は数字も表したので、文字数を増やすのを控えたのかもしれない。



ゲルマン語子音推移は揺籃期にあった歴史比較言語学を鼓舞する発見だったが、近年では重大な問題点が指摘されている。歯(茎)音で代表させると、印欧祖語の /t-/d-/dʰ/ のように有声有気音 (/dʰ/) はあるが、無声有気音 /tʰ/ がない閉鎖音組織は類型論的にきわめて稀である<sup>10</sup>。また、印欧祖語で両唇有声音 b が語頭で現れる例はなく、b を持つ語例もきわめて乏しい。同一語内に有声閉鎖音の連続もないので、\*ged- や \*deb- のようなごくあたりまえの語形も再建できない。ゲルマン語にも p (<印欧 b) で始まる語は存在しない。

そこで、b /b/, d /d/, g /g/ を「声門化無声閉鎖音」(glottalized voiceless stop)、つまり、口腔と声門を同時に閉鎖して喉頭を持ち上げ、その間の空気だけを放出する「放出音」(ejective)の /pʰ/, /tʰ/, /kʰ/ に置き換えるアイデアが生まれた。放出音とはなじみの薄い用語だが、アルメニア語東部方言、隣接する非印欧語族のコーカサス諸語、それに朝鮮語の「濃音」にも例がある。放出音は音声学的な理由から無声無気音で、両唇音は稀であり、同一語内で連続して現れないので、上記の事実と合致する。これを「声門化音説」(喉頭化音説 glottalic theory)といい、フランス人のマルティネ(André Martinet 1908~99)の1953年の説にさかのぼる<sup>11</sup>。

一方、s + {p/t/k}の連続では p/t/k は摩擦音化せず(例、ゲ \*sternōn「星」(英 star)、ゴ stafrnō <印欧 \*ster- < \*h<sub>2</sub>stér-, ギ astér), {p/t/d} + {p/t/k}の連続では前の子音だけが摩擦音化した(ゲ \*ahtau「8」(英 eight)、ゴ ahtau <印欧 \*oktō(u), ギ oktō)。このことから、p, t, k は有気音 (/pʰ/, /tʰ/, /kʰ/) の性格が強かったとも考えられる。ホパー(Paul J. Hopper)およびそれとは別にグルジア人のガムクレリゼ(Tamaz V. Gam-

<sup>10</sup> この点を指摘したのは、ブラハ学派構造主義言語学の巨匠ヤーコブソン(Roman Jakobson 1896~1982)である(Jakobson 1958)。ヤーコブソンはまた、後述するように、印欧祖語に1種類の母音 /e/ のみを認める再建方法も類型論的に問題であるとした。これは類型論が歴史比較言語学に示唆を与えることを示した初期の考察とした名高い。ただし、印欧祖語と同類の閉鎖音組織を備えた言語も発見されており、母音が1種類の言語の存在も完全に否定されていない。

<sup>11</sup> 神山(2006: 29 ff.)、マルティネ(神山訳2003: 187 ff., Martinet 2004 (1986): 160 ff.)参照。

krelidze) とロシア人のイヴァーノフ (Vjaceslav V. Ivanov) は、最古の印欧祖語の閉鎖音系列を /t/-/d/-/d<sup>h</sup>/ から /t<sup>(h)</sup>/-/t'/-/d<sup>(h)</sup>/ に組み替える説を 1973 年に提唱した<sup>12</sup>。これは朝鮮語や奄美大島などの琉球方言にも見られ、ゲルマン祖語にかなり近い。つまり、従来とは逆にゲルマン語やアルメニア語のほうが古く、他の印欧諸語が子音推移を被ったことになる。声門化音説には異論も多いが、近年ではほとんどの解説書に言及されている。

声門化音説はゲルマン語子音推移の解釈にも影響を及ぼした。ドイツ人のフェネマン (Theo Vennemann) はゲルマン語のデータと類型論的視点を重視して、最初期のゲルマン祖語の閉鎖音系列を /t<sup>h</sup>/-/t'/-/d<sup>h</sup>/ ととらえ直し、「高地ドイツ語子音推移」を含めてグリムの法則に根本的な再検討を施した<sup>13</sup>。たとえば、古典的解釈では第Ⅲ系列で (印欧 d<sup>h</sup>>) ゲ d/ð/>/d/ という「摩擦音>閉鎖音」の変化をゲルマン語内部に想定している。すぐに気がつくように、英語では live, love の摩擦音 v [v] はドイツ語の対応語 leben, lieb の閉鎖音 b [b]/[p] (←/b/<sup>14</sup>) に対応し、語中と語末で /v/>/b/ の変化を起こしていない。オランダ語では、対応語 leven ['leːvə(n)], lief [liːf] の摩擦音 v [v]/f [f] (←/v/) だけでなく、英語の give, wagon, twig やドイツ語の geben, Wagen, Zweig の閉鎖音 g [g]/[k] (←/g/) が geven ['ɣeːvə(n)], wagen ['vaːɣə(n)], twijg [tʰɔiɣ] のように摩擦音 g [ɣ]/[x] (←/ɣ/) に対応し、ガ行の有声閉鎖音をまったく欠いている。有声閉鎖音は軟口蓋では類型論的にやや一般性が低い、すなわち「有標」(marked) であるとしても、ゲルマン語子音推移から 2 千年以上たっても「摩擦音>閉鎖音」の変化が完了せず、一部では始まってもないとい

<sup>12</sup> Gamkrelidze/Ivanov(1973), Hopper(1973) 参照。非声門化音 /t<sup>(h)</sup>/, /d<sup>(h)</sup>/ の有気性 /<sup>h</sup>/ の有無は余剰的 (redundant) で、個々の言語の歴史的発達に応じて反映される関与的 (relevant) な特徴とされている。音韻論的に「弁別的」(dinstinctive) な特徴を重視して解釈すれば、/t<sup>(h)</sup>/-/t'/-/d<sup>(h)</sup>/ は /t/-/t'/-/d/ (非声門化無声—声門化—非声門化有声) とみなしてかまわない。

<sup>13</sup> Vennemann (1984), (1985) および Frey (1994: 23-37) の解説参照。

<sup>14</sup> 現代語の発音記号「//」は推定音ではなく、音素であることを示し、「←」「→」は共時的な語形変化または派生関係を示す。

うのは奇妙である。類型論的にも、「閉鎖音>摩擦音」に比べて「摩擦音>閉鎖音」の変化は稀である。フェネマンは有声摩擦音d/ð/の代わりに、調音の度合いが弱く有声性が高い「軟音」(lenis)の閉鎖音(/d/)を想定した。そして、それが南部のドイツ語では調音の度合いが強く無声性が高い「硬音」(fortis)に変わり(/d/ > /t/)、英語やオランダ語では有声化と摩擦音化(/d/ > /d/, /ð/)が起こったとした。

ただし、それでもゲルマン語子音推移の対応それ自体は揺るがない。音韻対応とは古語の文献に現れた文字間の抽象的な対応関係であり、実際の音価を特定するものではない。本書でも祖語や古語の例に「//」で囲った発音記号を添えることがあるが、あくまで便宜的措置である。次に述べる「ヴェアナーの法則」はドイツ語で grammatischer Wechsel 「子音字交替」ともいう。この grammatisch は「文法」ではなく、ギリシャ語の gramma 「文字」の意味である<sup>15</sup>。つまり、例外的な文字が現れているので、音韻的にも異なるはずだと推定したのである。音韻対応とは楽譜に記された音符のようなものである。そこからどんな音楽が紡ぎ出されるかは、演奏者の解釈と使用楽器の種類による。バッハの作品はチェンバロによる演奏のほうが、往時のバロック音楽の響きに近いことはまちがいない。ただ、現代のピアノでひいても、そのすばらしさは十分に表現可能であり、ときには作品の本質をより鋭く反映することがある。

## 2.2. 語頭アクセントとヴェアナーの法則 — 祖語にも歴史がある

印欧祖語では、語のアクセントの位置が語形変化などで交替することがあった。これを「可動的アクセント」(mobile accent)といい、ロシア語などでは頻繁に見られる。しかし、ゲルマン祖語では最終的に「語頭アクセント」(initial accent)に固定された。これは印欧語としては稀だが、隣接するケルト語(島嶼ケルト語, Insular Celtic)とは共通している。一説によれば、ラテン語などのイタリック語派でもかつてはそうであり、語頭アクセ

<sup>15</sup> Schweikle (1996<sup>4</sup>: 118) 参照。「文法的交替」という訳語は誤訳である。

ントへの固定を地理的隣接性のために共通の特徴を発達させた古中央ヨーロッパの「言語連合」(D Sprachbund) の一例とみなす意見もある<sup>16</sup>。なお、現代のゲルマン語ではアイスランド語を除いてこの原則は失われている。

問題はその時期である。じつは、語頭アクセントへの固定はゲルマン語子音推移の後で起こり、初期のゲルマン祖語には可動的アクセントの時代があったと推定されている。しかし、そもそもアクセントを記す正書法はゲルマン語では例がない。音声資料が失われた言語のアクセントパターンは、どうしてわかるのだろうか。

それを証明したのが、ゲルマン語子音推移の発見から半世紀以上後の1877年にその例外を規則化したデンマーク人のヴェアナー (Karl Adolf B. Verner 1846~96) であり、これを「ヴェアナーの法則」(Verner's law)<sup>17</sup>という。たとえば、ゴート語の *brōþar* /'bro:θar/「兄弟」(英 brother) では、印欧祖語の *t* に由来する無声摩擦音 *p* /θ/ が規則的に現れている。しかし、*fadar* /'faðar/「父」(英 father) では例外的に有声摩擦音の *d* /ð/ になっている<sup>18</sup>。これはギリシャ語の *frátēr*「兄弟」(語頭音節にアクセント) ↔ *patēr*「父」(第2音節にアクセント) に反映されているように、印欧祖語のアクセント位置の相違に由来する。ゲルマン語子音推移で *t* から生じた無声摩擦音 *p* /θ/ は有声音の間で有声化、つまり軟音化した。直前の音節にアクセントがある場合には阻止され、無声音にとどまったのである。類書には「無声摩擦音は有声音間で直前の音節にアクセントがないときに限って、さらに有声化した」という記述が散見されるが、厳密には正しくない。このことは、構造主義言語学の生みの親であるスイス人のソシュールがすでに指摘している<sup>19</sup>。ゲルマン語では語中の摩擦音が有声化する傾向があり、摩擦

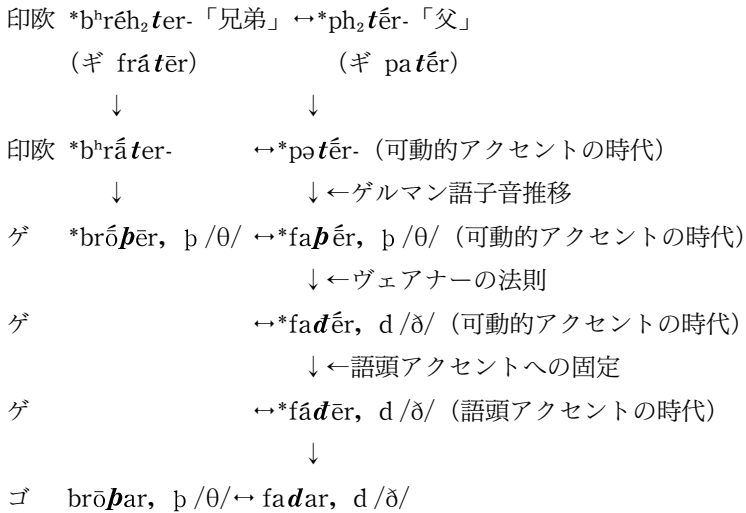
<sup>16</sup> Vennemann (2010 : 395), Krahe/Meid I (1969<sup>7</sup> : 13-21) 参照。

<sup>17</sup> 「ヴェルネル、ヴェルナー」ともいうが、デンマーク語の発音には「ヴェアナー」(または「ヴェアナ」) が最も近い。

<sup>18</sup> 英語の *brother*, *father* がともに有声摩擦音 *th* [ð] を示すのは、古英語内部の発達による。ラテン語の *pater*「父」が語頭音節にアクセントがあるのも、ラテン語内部の発達による。

<sup>19</sup> ソシュール (小林訳 1976<sup>4</sup> : 205), de Saussure (1972 (1916) : 201) 参照。

音には有声（軟音）と無声（硬音）の対立が希薄だった。語頭アクセントへの固定はヴェアナーの法則がはたらいた後の時代に起こり、ゲルマン祖語は「ゲルマン語子音推移>ヴェアナーの法則>語頭アクセントへの固定」の順に音韻変化を経たことになる。これは祖語にも歴史的発達段階があることを示す重要な証拠である。



同源の語の間でも、摩擦音に有声と無声の交替が見られることがある。たとえば、同じ「10」を表す数詞でも、ゴ taíhun 「10」(英 ten)/ド zehn (<古高ド zehan) ↔ゴ -tig.../ド -zig 「…十」(英 -ty, ゴ twai tigjus/ド zwanzig, 英 twenty) のように、無声音 h /x/ と有声音 g /ȝ/ (>/g/) が交替している。前者はゲルマン語子音推移だけを経て、ゲ \*téhun<印欧 \*dékm̥と変化した。後者はヴェアナーの法則も被り、ゲ \*teǵúz-<ゲ \*tehúz-<印欧 \*dekú- と有声化した。これには、印欧祖語に由来する歯擦音 s /s/ の有声化 (/s/ > /z/) も加わった。古典的解釈では、ゲルマン語子音推移の第 I 系列は無声摩擦音 /f/, /θ/, /x/, /xʷ/, /s/ と有声摩擦音, /v/, /ð/, /ȝ/, /ȝʷ/, /z/ を生み、後者は第 III 系列の有声摩擦音と合流した。

ヴェアナーはこのことをゲルマン語内部の事実に基づいて明らかにした。他の語派の言語資料を援用する比較方法にたいして、これを「内的再建」(internal reconstruction)と呼ぶ。記録以前の言語の姿は同系の他の言語を欠いていても、当該言語の資料だけで復元できることがある。この意味でもヴェアナーの法則の意義は大きい。

母音や有声子音の間の摩擦音が直前にアクセントがある場合を除いて有声化する例には、英語の<sup>ˈ</sup>exercise [ks]「練習」↔ex<sup>ˈ</sup>ertion [gz]「尽力」、<sup>ˈ</sup>exhi<sup>ˈ</sup>bition [ks]「展示」(ex-は副アクセント)↔ex<sup>ˈ</sup>hibit [gz]「展示する」、天文台で有名なGreenwich「グリニッジ」、Norwich「ノリッジ」などの地名(-ch [dʒ]), ドイツ語のNerven ['nɛʁfn̩]「神経(複数形)」↔nervös [nɛʁ'vø:s]「神経質な」などがある。英語の前置詞of [əv]は弱く発音することが多いが、古くは不変化詞off [ɔ(:)f]の弱形だった。What are you afraid of?では、ofにアクセントが置かれれば、fはoffと同じ無声の[f]になる<sup>20</sup>。英語のth-で始まる一般語はthink, thank, throwのように無声の[θ]だが、弱く発音することが多い少数の機能語the, then, than, thus, this, that, thoughは有声の[ð]として定着している。障害音は強く発音すると呼気が多く出る硬音になり、無声を保ちやすいが、弱く発音すると呼気が少ない軟音になり、声帯が狭まって有声化しやすい。声帯を振動させないひそひそ話しでは、有声と無声は調音の強さによる呼気の多少、つまり硬音・軟音で区別する。

ヴェアナーの法則はゲルマン語子音推移、すなわちグリムの法則の例外を新たに規則化し、「音韻法則に例外なし」という青年文法学派のテーゼを導いただけにとどまらない。それはグリムの法則よりも類型論的に無理がなく、広範囲に適用される普遍性の高い音韻規則といえる。母音交替におけるその意義については次に述べる。

<sup>20</sup> 寺澤(編)(1997:1662)参照。

### 2.3. 母音変化と4母音組織——大昔は母音が乏しかった

母音についてはどうだろうか。ゲルマン祖語では印欧祖語の短母音 a と o が a に融合し、それとは対照的に長母音 ā と ō が ō に融合した。これには何らかの相互関係が想定されるが、それはともかく、ゴート語とラテン語、ギリシャ語の例で確認しておこう。

① ゲ a < 印欧 a/o

ゴ akrs 「耕地」(英 acre) ↔ ラ ager

ゴ salt 「塩」(英 salt) ↔ ギ hals, ラ salis (← sāl の属格)

ゴ ahtau 「8」(英 eight) ↔ ラ octō

ゴ hva 「何」(英 what) ↔ ラ quod

② ゲ ō < 印欧 ā/ō

ゴ brōþar 「兄弟」(英 brother) ↔ ラ frāter

ゴ bōkōs 「本(複数形)」(英 books) ↔ ラ fāgus 「ブナの木」(英 beech)

ゴ blōma 「花」(英 bloom) ↔ ラ flōs

ゴ flōdus 「潮流」(英 flood) ↔ ギ plōtōs 「浮遊している」

1.1. で挙げたフィンランド語への古い借用語 kuningas 「王」(ゲ \*kuningaz) などの -as (<ゲ -az) は、ギリシャ語の Hómēros 「ホメーロス」、kōsmos 「宇宙」などの男性名詞の -os と同源である。

詳述は省くが、最初期の印欧祖語には e という「1つの母音しかなかった」と推定されている<sup>21</sup>。これにヒッタイト語を含むアナトリア語派だけに保たれた喉頭音 (h<sub>1</sub>, h<sub>2</sub>, h<sub>3</sub>)<sup>22</sup> を前につけると、その他の短母音 (h<sub>1</sub>e > e, h<sub>2</sub>e > a, h<sub>3</sub>e > o) へと「音色づけ」(coloring) がなされ(例。ゴ akrs 「耕地」(英 acre) < ゲ \*akraz < 印欧 \*agro- < \*h<sub>2</sub>eǵr-)、語末や子音の前で/e/

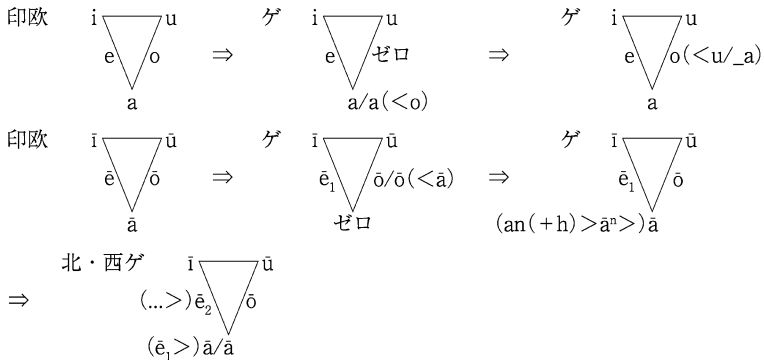
<sup>21</sup> ただし、母音がひとつしかない言語は類型論的に不自然ではある。注10参照。

<sup>22</sup> この喉頭音の音価については諸説があるが、その振る舞いから h<sub>1</sub>/h/, h<sub>2</sub>/x/, h<sub>3</sub>/x<sup>w</sup>/ またはそれぞれの有声音だったと推定される。

の後につけると喉頭音が消失し、その分の長さを後続母音が補う「代償延長」(compensatory lengthening)によって、長母音 ( $eh_1 > \bar{e}$ ,  $eh_2 > ah_2 > \bar{a}$ ,  $eh_3 > \bar{o}$ ) が誕生した (例. ゴ *brōþar* 「兄弟」(英 *brother*) < ゲ *\*brōþēr* < 印欧 *\*b<sup>h</sup>rāter* < *\*b<sup>h</sup>rah<sub>2</sub>-* < *\*b<sup>h</sup>reh<sub>2</sub>-*)。

分岐直前の印欧祖語の短母音は、類型論的に安定したラテン語のような a, e, i, o, u の 5 母音組織に発達していたが、ゲルマン祖語は o を欠く 4 母音組織になった。母音 o はゲルマン祖語の末期に狭母音 u が後続音節の広母音 a/ā の影響で開口度を広げて、部分的に埋め合わされた ( $u > o/_\{a/\bar{a}\}$ , 古英 *horn* 「角」< ゲ *\*xurnan*)。長母音も印欧祖語末期の  $\bar{a}$ ,  $\bar{e}$ ,  $\bar{i}$ ,  $\bar{o}$ ,  $\bar{u}$  の 5 母音組織から  $\bar{a}$  を欠く 4 母音組織になった。 $\bar{a}$  が抜けた穴は, an が h (< ゲ *\*x*) の前で n の消失とそれを補う代償延長で鼻音長母音  $\bar{a}^n$  になり ( $an > \bar{a}^n/_\{h\}$ ), 鼻音性を失って長母音  $\bar{a}$  として部分的に埋め合わされた (例. ゴ *pāhts*/ 古高ド *gidāht*/ 古ノ *pātta* (英 *thought*) 「同右, 過去分詞」< ゲ *\*panhta* ← *\*pankjanan* 「考える」(英 *think*))<sup>23</sup>。

長母音  $\bar{a}$  の本格的な穴埋めは, ゲルマン祖語の  $\bar{e}$  (=  $\bar{e}_1$  /æ:/) が開口度を広げ, ゴート語を除く北および西ゲルマン語で  $\bar{a}$  となったことによる ( $\bar{e}$  (=  $\bar{e}_1$  /æ:/) >  $\bar{a}$ , 古高ド *lāz(z)an*/古ザ *lātan*/古ノ *lāta* ← ゴ *lētan* 「…させる」(英 *let*) < 印欧 *\*lē-*)。ドイツ語の地名 Schwaben 「シュヴァーベン



<sup>23</sup> 同様に, h の前で  $in > i^n > i$ ,  $un > u^n > u$  の変化が起こった。なお, 下の表では二重母音(ゲ ai, au, eu, iu) は割愛してある。「\$」は音節境界を表す。



地方」はラテン語の *suēbī* 「スエービー族」にたいして、新しい長母音を示している。すると、今度は  $\bar{e}$  ( $=\bar{e}_1 / \text{æ}:/$ ) の穴埋めに、ゴート語を除いて新しい  $\bar{e}$  ( $=\bar{e}_2 / \text{e}:/$ ) が複数の源 (下表「…」) から誕生した。

私たちにとって英語やドイツ語の発音がむずかしい理由のひとつに、日本語よりも細かく母音を区別している点がある。ただし、奈良時代までは日本語にもイ列とエ列、それにオ列で「上代特殊仮名遣」と呼ばれる「甲類」と「乙類」が区別があり、母音が豊富だったとされている。ところが、ゲルマン語は時代をさかのぼると、日本語よりも母音が少なくなるのである。ゴート語も子音組織はゲルマン祖語の状態をかなり保っているが、母音については  $e > i$  や  $o > u$  のように開口度を狭めて、短母音を基本的に  $i / i/$ ,  $a / a/$ ,  $u / u/$  の3種類にしてしまった ( $\bar{e} / \text{e}:/$ ,  $\bar{o} / \text{o}:/$  は長母音のみ)。  $aí / \text{ɛ}/$ ,  $aú / \text{ɔ}/$  は単独の文字ではつづらず、  $h / \text{hw} (=hw) / r$  の直前で  $i / i/$ ,  $u / u/$  が開口度を広げて現れ、異音の性格が強い (例. *baíran / 'beran/* 「運ぶ」(英 *bear*), *saívan / 'sɛhʷan/* 「見る」(英 *see*), *daúr / dɔr/* 「門, 扉」(英 *door*))。ただし、外来語では *naúbaímbaír* 「11月」(ラ *november*) のように、その他の場合にも  $aí [ɛ]$ ,  $aú [ɔ]$  が現れるので、5母音組織 ( $a, i, u, aí [ɛ], aú [ɔ]$ ) への移行段階にあったとも考えられる。

#### 2.4. ウムラウトと「割れ」——新しい母音はこうして誕生した

現代ゲルマン諸語の豊富な母音は、どのようにして生まれたのだろうか。その中には、語幹に相当する先行音節の母音が接尾辞に相当する後続音節の母音を先取りし、吸収するようにして発達したものが少なくない。結果的に後ろの母音が前の母音に影響を与えるので、「逆行同化」(regressive assimilation) という。一方、北東に隣接する非印欧語のバルト・フィン諸語は、先行音節の母音の影響で後続音節の母音が変化する「母音調和」(vowel harmony) を示す。これは「順行同化」(progressive assimilation) の例である。

ドイツ語には  $\ddot{a}$ ,  $\ddot{u}$ ,  $\ddot{o}$  とつづる「ウムラウト」(mutation, ド *Umlaut*) と呼ばれる母音がある。これは後続音節に  $i$  (または  $j / j/$ ) が続くと

きに a, o, u が姿を変えたもので (a>ä/\_\$i, u>ü/\_\$i, o>ö/\_\$i), 「i-ウムラウト」(ド i-Umlaut) という<sup>24</sup>。ウムラウトとは厳密には ä, ü, ö の特殊文字ではなく、音韻変化のプロセスを指すのである。現代ドイツ語のつづりと発音で示すと, i [i]/ie[i:] は前舌狭母音なので, 広母音の a [a]/[a:] はその影響で開口度を狭めて ä [ɛ]/[ɛ:] になり, 後舌円唇母音 o [ɔ]/[o:], u [ʊ]/[u:] は調音位置を前方に移動させて, 前舌非円唇母音 e [ɛ]/[e:], i [i]/[i:] の円唇母音にあたる ö [œ]/[œ:], ü [y]/[y:] になった<sup>25</sup>。ライン河畔の大聖堂で有名な古都 Köln, 大作家 Goethe (oe=ö) は「ケルン」, 「ゲーテ」と転写する。このように, ö は後舌母音 o とはもはや無関係な e の円唇母音であり, ü も u とは無関係な i の円唇母音なのである。後の時代にウムラウトを引き起こした i はあいまい母音 e [ə] に弱化するか, 脱落してしまった。こうして条件が不明確になると, ä /ɛ:/, ö /œ:/, /o:/, ü /y:/, /y:/ は晴れて独立した音素になった。

ド Gast [gast] 「客」(英 guest) < 古高ド・中高ド gast

→ 高ド Gäste ['gɛstə] 「同上(複数形)」(英 guests) < 中高ド gēste < 古高ド gesti

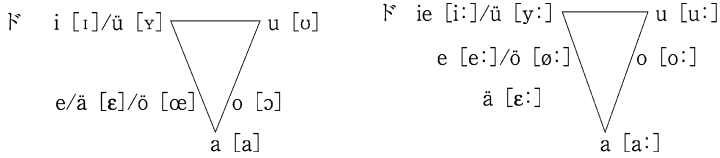
ド Fuß [fu:s] 「足」(英 foot) < 中高ド vuoʒ < 古高ド fuoz

→ 高ド Füße ['fy:sə] 「同上(複数形)」(英 feet) < 中高ド vüeze < 古高ド fuozi

ド hören ['hø:ʁən] 「聞く」(英 hear) < 中高ド hæren < 古高ド hōren < ゲ \*xauzjan (ゴ hauzjan)

<sup>24</sup> o のウムラウト (o>ö/\_\$i) には類推または後の時代の発達による例が多い。ゲルマン語の o は後続音節の a の影響で生まれたので (u>o/\_\$a), o には i が後続しなかったからである。

<sup>25</sup> 短母音 a のウムラウトは ä 以外に e とつづることもある。これは後述する「第一次ウムラウト」の場合に多い(例, ド denken「考える」→ス tänka)。デンマーク語, ノルウェー語, フェロー語では ä には æ, ö には ø の文字が対応する。



英語でも「i-ウムラウト」で類似した母音が誕生した。ただし、後の時代に唇のまるめが失われ、現在では残っていない。foot ↔ feet (ド Fuß ↔ Füße), goose ↔ geese (ド Gans ↔ Gänse), full ↔ fill (ド voll ↔ füllen) などがその例である。類型論的に前舌母音は非円唇が多く、前舌円唇母音は「有標性」(markedness)が高いので、英語の変化は不自然ではない。前舌円唇母音をすべて非円唇化した例には、ルクセンブルク語 (例, Dier [diəR] 「ドア」(ド Tür) とペンシルヴェニアドイツ語 (例, dir [dir] 「ドア」), イディッシュ語 (例, tir [tir] 「同左」) がある。ウムラウトを最も広範に起こしたアイスランド語も, dyr [d̥i:r] ([i:] </y/) 「ドア」, synir [ˈsi:nir] 「息子」(sonur の複数形, ド Söhne), kýr [kʰi:r] 「雌牛」([i:] </y:/, 英 cow) のように非円唇化を被った。フェーロー語でも dyr [d̥i:r], synir [ˈsi:nir], kúgv [kʰıgv] 「雌牛」となる。

i は a, u とともに母音の基本的分布を示す母音 3 角形の頂点に位置し、ゴート語の基本的な 3 母音組織が示すように、調音位置が明確で最も安定している。じつは、ウムラウトは a と u によっても起こった。「a-ウムラウト」(ド a-Umlaut) については、o を失ったゲルマン祖語が後続音節の a/ā の影響で、u が口開度を広げて o を回復したのが一例である<sup>26</sup>。英語の help 「助ける」の過去分詞 helped は古英語では (ǣ-)holpen だったが、この o はゲルマン祖語の \*hulpanaz の u から「a-ウムラウト」によって生じた。ドイツ語の geholfen, アイスランド語の holpinn も同様である。

「u-ウムラウト」(ド u-Umlaut) は北ゲルマン語で顕著に見られる。とくにアイスランド語では現在でもある程度、条件がはっきりしており、語頭音

<sup>26</sup> Van Coetsem (1994 : 48, 57), Jasanoff (1994 : 260) 参照。

節では a>ö (<古ノ q [ɔ]), 第2音節以下では影響が弱まって a>u となる。たとえば, kalla 「呼ぶ」(英 call はその借用語) の語形変化は ég kalla 「私は呼ぶ」↔ við köllum (<古ノ kǫllum) 「私たちは呼ぶ」, ég kallaði 「私は呼んだ」↔ við kölluðum (<古ノ kǫlluðum) 「私たちは呼んだ」となる。一方, land 「国(単数主格・対格)」↔ lönd 「国(複数主格・対格)」のように無語尾で条件が不明な例は, lönd<古ノ lǫnd<\*landu のように歴史的に -u が失われた理由による。この場合, 大陸北ゲルマン語では類推がはたらき, デ barn 「子供」↔ börn 「同左, 複数形」(ø=ö), ス man 「男」↔ män 「同左, 複数形」, ニュ bror 「兄弟」↔ brør 「同左, 複数形」など使用頻度の高い少数の例しか残っていない。

上の説明で「後続音節の母音を先取りし, 吸収する」としたが, それと関連する現象に「割れ」(breaking) がある。「割れ」という用語は種々の現象に使われるが, ここでは先行音節の短母音 e が後続音節の母音 a/u の影響で二重母音化する北ゲルマン語の現象に限定しよう (e> {ja/jö}/\_ \${a/u})。北歐にはノルウェー西海岸を彩るフィヨルド (fjord), テニスの元世界王者ビヨルン・ボルグ (ビェーン・ボリ, Björn Borg 1956~), アイスランドの人気女性歌手ビェルク (Björk Guðmundsdóttir 1965~) など, 「j+母音」を持つ名前が多い。英語の help (ゴ hilpan), ドイツ語の bieten (ゴ biudan) 「提供する」には, アイスランド語の hjálpa, bjóða やスウェーデン語の hjälpa, bjuda が対応する。アイスランド語の bjarg 「救助」(ド bergen 「救助する」), björn 「熊」(英 bear) で変化の過程を示してみよう (V: 母音, C: 子音, \$: 音節境界, 「˘」: アクセント)。

$$j\acute{V}_2CC\$ < V_1\acute{V}_2CC\$ \_ < \acute{V}_1 \underline{V_2C\$} CV_2 < \acute{V}_1 C\$ CV_2$$

ア bjarg<古ノ bjarg<\*bĕārg<\*bēarga<\*bērga

ア björn<古ノ bjǫrn<\*bĕǫrn<\*bēornu<\*bērnū

bjarg は「a による割れ」(a-breaking), björn は「u による割れ」(u-breaking) の例である。発端は後続音節の a/u を先行音節の e が自らの直

後に引き寄せるようにして、 $e > ea / (eu >)$   $eo$  となったことによる。後続音節の  $a/u$  は「語末音消失」(apocope) で失われ、アクセントが  $e$  から  $a/q$  ( $< o < u$ ) に移って「くだり二重母音」(falling diphthong) から「のぼり二重母音」(rising diphthong) に交替し、 $e$  は  $j$  に弱化して  $ja/jö$  ( $ö < q$ ) となった。ウムラウトは先行音節の母音が後続音節の母音の性質を先取りし、吸収するが、「割れ」は母音そのものを先取りし、吸収している。

ゲルマン語では二重母音 (VV) は長母音 ( $\bar{V}$ ) から生じたのことが多い。半分の長さしかない短母音 (V) から生まれた例は稀で、その場合にはたいてい別の要素が関係している。ゲルマン語以外から例を取ると、スペイン語の *padre* [paðre] 「父」とフランス語の *père* [pe:ʁ] 「父」を比べれば、フランス語では  $d$  が消えて短くなった分を補うように、代償延長によって短母音  $a$  [a] が長母音  $è$  [ɛ:] になっている。北ゲルマン語の「割れ」でも短母音  $e$  から長母音  $ea/eo$  を経て  $ja/jö$  に至ったのは、 $e$  だけが変身した結果ではない。ウムラウトと「割れ」は本質的に同じ原理に基づいている。古英語では *siolufur/seolfor* 「銀」(英 *silver*)  $<$  ゲ *\*silubran* のように、 $u$  の前で  $i > io/eo$  となる「 $u$  による割れ」に似た変化も「 $u$ -ウムラウト」(軟口蓋ウムラウト, ド *Velarumlaut*) と呼んでいる<sup>27</sup>。

前述のように、ゲルマン祖語には  $a/\bar{a}$  の前で  $u > o$  となる「 $a$ -ウムラウト」があった。ゲルマン祖語では英語の *is* やドイツ語の *ist* がギリシャ語の *esti* に対応するように、 $i/j$  の前で  $e > i$  となる「 $i$ -ウムラウト」に類する変化も起きていた。しかし、それ以外のウムラウトや「割れ」は祖語の分岐以後に起こり、言語ごとに大きな差がある。ウムラウトというと、私たちはドイツ語の  $\ddot{a}$ ,  $\ddot{o}$ ,  $\ddot{u}$  の文字を連想してドイツ語が本家本元と思いがちだが、かならずしもそうではない。ドイツ語でウムラウトが重要になるのは、後述するように後の時代の形態規則としてである。

文献以前の時代に最も広範にウムラウトや「割れ」を起こしていたのは、母音調和を有するバルト・フィン諸語に軒を接していたスカンジナビアの

<sup>27</sup> Brunner (1965<sup>3</sup>: 80-89), プルンナー (松浪他訳 1977<sup>2</sup>: 223f.) 参照。

北ゲルマン語である。英語も今では前舌円唇母音を失っているものの、文献以前の 700 年頃から非前舌母音すべてが広範囲で「i-ウムラウト」を起こしており、「u-ウムラウト」に類似した変化やその他の「割れ」も見られた。両言語ともにゲルマン祖語の \*gastiz「客」(英 guest) の -i- が脱落する前に、「i-ウムラウト」による語形(古ノ gestr, 古英 ġi(e)st) を示している。

一方、当時のドイツ語の語形は gast であり、「i-ウムラウト」は -i- の脱落以後に始まった。その時期は 2 つに分かれる。まず、8 世紀に南西部のアレマン方言で発生したとされる「第一次ウムラウト」(ド Primärumlaut) が起こった。ここでは、古高ド gesti「客(複数形)」(<ゲ \*gastiz, 英 guests) のように短母音 a (a > ä (e) / \_\_\$i) しか対象にならず (e は狭母音 /e/)、{h/w} + 子音 は除かれるなど制限が強かった。北ドイツの低地ドイツ語諸方言の前身である古ザクセン語では、例外が多く、一貫性に欠ける。ドイツ語では、半広母音 ä /ɛ/ を含むその他の短母音、長母音、二重母音のウムラウトは、文字に現れる限りでは 10 世紀末に中西部で起こり、11 世紀半ばまでに定着した。これを「第二次ウムラウト」(ド Sekundärumlaut) という。しかも、Osnabrück「オスナブリュク」(ドイツ北西部)、Saarbrücken「ザールブリュケン」(ドイツ中西部) にたいして Innsbruck「インスブルク」(オーストリア西部) という都市名が示すように、地域的に限定され、第一次ウムラウトの発生地 の東側に隣接するバイエルン方言にも及んでいない。

古語の時代に最も西側に位置していたオランダ語では、「i-ウムラウト」は少なくとも文字にはあまり記されず、広範な類推で失われ、長母音には例がない。ドイツ語の Gast (<古高ド gast, 英 guest) → Gäste (<古高ド gesti, 英 guests) はオランダ語では gast → gasten であり、大多数の複数形は後述する弱変化語尾 -(e)n (<ゲ -an) を伴う。ドイツ語の hören「聞く」(英 hear) は horen[ˈho:rə(n)]「聞く」であり、Claes という男名は「クラス」([klaːs]) であって「クレース、クラエス」ではない。

ウムラウトは同一起源にさかのぼる保証はなく、ばらばらに起こった可能性のほうが高い。それにしても、なぜこんなごちゃごちゃした変化がいくつも起きたのだろうか。その原因は語頭アクセントへの固定にあるのかもしれない。

ない。これは語のアクセントを語頭音節に引き寄せるように先取りし、吸収した現象ともいえる。ウムラウトと「割れ」はそれに呼応して、後続音節の母音の性質や母音そのものを語頭音節に先取りし、吸収しようとした結果とも解釈できる。

有アクセントの語頭音節に続く音節の母音は、アクセントという韻律的特性に加えて調音上の「素性」(feature)も語頭音節の母音に「明け渡し」、最も「無標」(unmarked)、つまり中立的な音価を持つ中舌非円唇のあいまい母音 [ə] に弱まり、脱落していった。ドイツ語やオランダ語では語頭の有アクセント音節が長母音化を起し、あいまい母音に弱化した後続音節の量的性質を吸収したように見える(古高ドイツ *taga* [a] (英 *day*) > ド *Tage* [a:] (英 *days*))。語頭アクセントの原則を最も強く保持したのは、後述する「頭韻詩」(alliterative verse)の伝統を最も遅くまで守った北ゲルマン語である。アイスランド語はあいまい母音 [ə] を欠き、後続する奇数音節の母音を中心に、短母音化または脱落という激しい変化を被った。つまり、語頭音節の母音が後続音節の母音を完全に吸収したのである。ウムラウトと「割れ」が北ゲルマン語で最も広範囲に及んだ理由は、このためかもしれない。

ただし、例外が2つある。ひとつは初期のルーン文字銘文である。後述する『ガレフスの黄金の角』では、ゲルマン祖語後期の「a-ウムラウト」(u>o/\_\$a)を経た *horna* 「角」にたいして、*-gastiR* 「客」(英 *guest*) は「i-ウムラウト」を欠いている。つまり、それほど古い時代の資料である。もうひとつはゴート語である。ゴ *gasts* (ド *Gast*, 英 *guest*) → ゴ *gasteis* (ド *Gäste*, 英 *guests*) のように、ゴート語にはウムラウトがほとんど見られない。通説では、これはウムラウトが起こる以前に話者が故地を離れたためとされている。

以上の結果、古ゲルマン諸語は多数の母音たちの群れであふれかえっていた。こんな複雑なシステムを死守するのは並大抵の技ではない。やがて中世から近代への移行期を迎えると、英語の「大母音推移」(Great Vowel Shift)をはじめ、ゲルマン語の母音組織はいたるところで大規模な「連鎖推移」(chain shift)を被ることになる。

## 2.5. 動詞の時制組織 — アスペクトから時制 (テンス) へ

動詞の話題に移ろう。一般に、出来事またはその関与者を発話時または発話状況と関係づけるはたらきを「ダイクシス」(直示, 場面内指示, deixis) という。「1 日前に初雪が降った」では基準となる日を任意に設定できるので、ダイクシスとは無関係だが、「昨日, 初雪が降った」ではこの文を発話した日が基準になるので、ダイクシスがはたらいている。発話時との関係で「過去—現在—未来」を区別する「時制」(テンス, tense) は、ダイクシス的な文法範疇である。一方、発話時とは無関係に出来事の時間的構造を特徴づける「アスペクト」(相, aspect) は、非ダイクシス的な文法範疇である。

印欧祖語には、現在時制のほかに過去時制に類する 3 種類のアスペクトを区別する語幹があった。開始・終結は考慮せずに出来事を内側から継続・反復の断面ととらえる「未完了 (imperfect) 語幹」, 現在語幹から形成), 開始・終結を含めて出来事を外側から全体的・瞬間的にとらえる「アオリスト (aorist) 語幹」, 終結した出来事の結果を状態としてとらえる「完了 (perfect) 語幹」である。ゲルマン祖語はアオリスト語幹を破棄し、未完了語幹を「現在 (present) 語幹」, 完了語幹を「過去 (preterite) 語幹」に置き換え、アスペクトの対立から 2 種類の時制組織に再構築した。

「太郎は来て、ここにいる」が「太郎はここに来た」ことを示すように、結果としての現在の状態を過去の出来事に結びつけるのは容易である。結果がはっきり出ないときには、過去の行為が強調されることもある。備え十分に「勉強している」はずの受験生も、入試に失敗してしまえば、「勉強した」記憶だけが空しく残るのみである。過去形との対比から、継続表現としての現在形を性質・習慣・規則・真理など無標、つまり一般的な時制表現とすることにも、それほど無理はない。以上は直説法でのことだが、その現在形は未来の出来事も表すようになった。それには、これから起こる出来事を表す印欧祖語の「接続法」(subjunctive) を直説法が吸収したことも関係している。こうして、ロシア語の完了体・不完了体、フランス語の単純過去・半過去に類するアスペクトの区別は、ゲルマン語では 1 語の統合的な語形変化としては認められなくなった。



英語の「be 動詞+現在分詞」による進行形や「have+過去分詞」による完了形のように、助動詞を用いた2語による分析的な「迂言形」(periphrastic form)としてのアスペクト形式は、ずっと後の時代の発達である。ただし、結果的にそれはかつての3つのアスペクト語幹と意味的に類似することになった。to build「建てる」はアオリスト語幹、to be building「建てつつある」は未完了語幹、to have built「建ててしまっている」は完了語幹に対応するともいえよう。この点で英語は形式的に「モダン」だが、意味的には「古風」なのである。John has built a house. のような英語の現在完了形は「ジョンは家を建てたものとして (built) 持っている (has)」という結果としての現在の状態表現に由来し、「ジョンは家を建てた」という過去の出来事の表現に近づいている。ドイツ語やオランダ語など、現在完了が過去の出来事を表す最も一般的な形式になった例は少なくない。

ゲルマン語の過去形が印欧祖語の状態表現としての完了形から発達した事情は、完了形に由来する一部の語形が例外的に過去形にならず、状態の意味を保って現在形になった事実に反映している。その一例は、ゴート語の現在形 wait「(私は)知っている」(witan「知っている」)およびドイツ語の現在形 (ich) weiß「同左」(wissen「同左」)である。これはラテン語の *videō*「(私は)見る」(英語の *video*「ビデオ」と同源)の完了形 *vidi*「(私は)見た、見てしまっている」やギリシャ語の完了形 *oīda*「同左」にあたる<sup>28</sup>。かつてガリアを制圧したカエサルは、ラテン語で *vēni, vīdī, vīcī*「来た、見た、勝った」と完了形を用いてローマに書簡を送ったというが、これは「今、制圧した状態にある」という意味であって、「初めは勝っていたが、そのうち負けてしまった」などということではない。

ゴート語の *wait* とドイツ語の *weiß* は古くは語形的に過去形だが、状態の意味を保ったので、現在形として定着した。物事を「見た、見てしまっている」ために、それを「知っている」というわけである。このような動詞を「過

<sup>28</sup> ゴート語の *wait* の *w* はラテン語の *vidi* の *v* /*w*/, *ai* と *t* はギリシャ語の *oi* と *d* に規則的に対応する。*wait* と *witan* の *ai* と *i* は、後述する強変化動詞第1系列過去形単数 (*a+i*) と複数 (ゼロ+i) の母音交替を示している。

去現在動詞」(preterite present) という。ゴート語には十数個あるが、現代ゲルマン諸語ではおもに「話法の助動詞」(法助動詞, modal verb)に残っている。英語には know と同源で「習っている, 知っている」から「…できる」の意味に転じた can, 「負っている」(D schuld) から「…するべきだ」の意味に転じた shall のほかに, may, must, 希求法が起源の will がある。いずれも現在形 3 人称単数で -(e)s がつかないのは, このためである<sup>29</sup>。

## 2.6. 母音交替と強変化動詞 — 不規則動詞は規則動詞だった

日本語では「アメ」(雨)―「アマガサ」(雨傘), 「キ」(木)―「コノハ」(木の葉)のように, 複合語で母音が交替することがある。英語でも to bind 「結ぶ」―band 「ひも; 一団」/bond 「きずな」/bundle 「束」のように, 派生語には類似した例が少なくない。両者は別々の現象だが, 共通するのは, 明確な調音方法で生み出される子音に比べて, 呼気の流れを阻害せず, 調音器官が間接的に関与するにとどまる母音は, 語彙的意味の中核を担いにくいという一般的な傾向である。荒っぽくいうと, 英語の母音をすべて e に代えても, Thank yee se mech fer yeer essestence は「ご支援に深謝します」(Thank you so much for your assistance.) の意味にとれそうな気もする。アラビア語などが属するセム語族は基本的に子音字だけをつづるのであり, 古くは印欧語族との親縁関係が主張されたこともあった。

上の例は派生名詞なので, 語彙的意味が関与して体系的にとらえにくい, 不規則動詞の変化も bind―bound―bound という語幹母音の交替を示す。不規則動詞は日本語ではカ変動詞「来る」とサ変動詞「する」くらいだが, 英語では比較にならないほど多く, 重要な基本語ばかりなので, 丸暗記しないとお話にならない。しかし, いくらなんでも大切な語にでたらめな変化をさせたがる物好きはいない。じつは, 元来, これは規則的にそうだったのであり, take の過去形は自動的に took となり, sing の過去分詞は文句なく sung だった。「不規則」動詞は「規則」動詞だったのである。かつての規則性は種々

<sup>29</sup> dare (→ he dare > dares), owe (> 接続法過去 ought (to)) も含まれる。

の要因で乱されてしまったが、歴史比較言語学の手法をもってすれば整然とした姿によみがえる。なにしろ大昔の出来事なので多少の忍耐を要するが、そのしくみを解き明かしてみよう。

印欧語には祖語の時代から「母音交替」(アブラウト, vowel gradation, ド Ablaut)があり、形態的手段として文法的役割も担っていた。ゲルマン語は一步進んで、動詞の語幹母音を母音交替させることで、体系的に「異形態」(allomorph)を作り出した。それが現代語のいわゆる「不規則動詞」の大多数である。母音交替によって語幹自体が変わるので、「変化の度合いが強い」という意味で「強変化動詞」(strong verb)といい、ほとんどが本来の動詞で基本語に属する。

上述のように、ゲルマン祖語は現在の状態を表す完了語幹を過去語幹に転用した。新たに動詞変化の基礎となったのは、現在形(=不定詞)を中心に過去形単数、過去形複数、過去分詞を加えた4語幹である。英語(drink—drank—drunk)やドイツ語(trinken—trank—getrunken)の動詞は3基本形だが、古くは過去形の単数と複数は母音交替が別だった。アイスランド語のように、今でもdrekka—過去形単数 drakk/複数 drukkum—drukkiðとして区別する例もある。西ゲルマン語では、オランダ語や西フリジア語などに一部でその区別が残っている。ただし、同じ動詞の過去形が2種類なのは面倒なので、英語やドイツ語では類推によってどちらかに統一された。英語のwas ↔ were (<古英 wæs ↔ wæron)は類推を免れた稀な例である。一般に使用頻度が高い語形は頻繁に意識されるので、類推を受けずに古形が保たれる傾向がある。

ゲルマン祖語の強変化動詞は語幹母音eとaを基本に次の2つのパターンに分かれていた(ゲ a<印欧 a/o, ゲ ð<印欧 ā/ōの変化参照)。

	現在形・不定詞	過去形単数	過去形複数	過去分詞
① ゲ	e	a	ゼロ <sup>30</sup>	ゼロ

<sup>30</sup>「ゼロ」とはアクセントを欠いて弱化した結果、音価が失われたことを示す。

	印欧	e	o	ゼロ	ゼロ
②	ゲ	a	ō	ō	a
	印欧	a/o	ā/ō	ā/ō	a/o

それにしても、どうやってこんな手品みたいなことができたのだろうか。それにはかつての可動的アクセントが関係している。母音交替にはアクセントの強さに応じて段階があり、階段を上下するのにたとえて「階梯」(階程, grade, ド Stufe) という。①は印欧祖語から受け継いだパターンである。e を基本とする「e-階梯」(e-grade) は、過去形単数で何らかの理由で a (<印欧 o) を示す「a-階梯」(a-grade<印欧 o-grade) に「質的交替」(qualitative alternation) を起こした<sup>31</sup>。過去形複数と過去分詞では無アクセントになって弱化し、これを「ゼロ階梯」(null grade) という。一方、②はゲルマン祖語で発達したパターンで、a (<印欧 a, o) を基本とし、過去形単数・複数が強いアクセントを担って長母音になる「延長階梯」(lengthened grade) を示す。このパターンはゲルマン祖語では1種類だが(ゲ a~ō), 印欧祖語では2種類あり(印欧 a~ā, o~ō), 短母音と長母音の交替に由来する。これを「量的交替」(quantitative alternation) と呼んでいる。

さて、①のパターンでは過去形複数と過去分詞がゼロ階梯になっている。つまり、語幹母音が弱まって消えてしまい、「語幹ではなく、語尾にアクセントがあった」ことになる。なぜそんなことがわかるのだろうか。それは「ヴェアナーの法則」のおかげである。英語の was ↔ were に対応するオランダ語の was [ʋas] ↔ waren ['ʋa:rə(n)] が示すように、was の s は無声の [s] だった<sup>32</sup>。英 were/オ waren の r は無声摩擦音 s [s] が母音間あるいは母音と「鳴音」(sonorant, m/n/l/r) の間で有声化し ([s] > [z]), 同じく舌尖のふるえ音 r [r] に変わった結果である ([z] > [r])。これを「ロータシズム」

<sup>31</sup> e~a (<印欧 o) の交替が「高低アクセント」(pitch accent, 音楽的アクセント musical accent) に由来するという類書の記述を見かけるが、根拠が乏しい。

<sup>32</sup> 英語の was の s が有声音になったのは、後代の英語史上の理由による。

(rhotacism) といい、ゴート語を除いてばらばらに広範囲に起こり、ラテン語にも見られる。s [s] > z [z] となった理由は、ヴェアナーの法則に従って、大昔は直前の母音 a が無アクセントだったことによる。オランダ語の不定詞 verliezen [vər'liːzə(n)] 「失う」と過去形単数 verloos [vər'loːs], 複数 verloren [vər'lo:rə(n)] と過去分詞 verloren [vər'lo:rə(n)] の z [z]/s [s] ~ r [r] のペアはこの事情を伝えている。ただし、アクセントはすべて語幹に置かれるようになった。以上の交替はサンスクリットでは不定詞では語幹、過去分詞では接尾辞にアクセントがあった事実からも説明できる。しかし、ゲルマン語の資料に基づく内的再建からも裏づけは可能なのである。

①のパターンは母音 e に後続する要素に応じて「相補分布」(complementary distribution) をなし、第 I ~ V 系列に分かれていた。詳述は省くが、母音 a を基本に第 VI 系列を形成する②のパターンを添えて、ゴート語で例示してみよう (L/N:l/r/m/n, C:子音)<sup>33</sup>。

- ① 第 I 系列 e+i /j/
- 第 II 系列 e+ü /w/
- 第 III 系列 e+{流音 (r/l)/鼻音 (m/n)}+子音
- 第 IV 系列 e+{流音 (r/l)/鼻音 (m/n)}
- 第 V 系列 e+その他の子音
- ② 第 VI 系列 a

	現在形・不定詞	過去形単数	過去形複数	過去分詞
I	ゲ e+i	a+i	ゼロ+i	ゼロ+i
	>ei /i:/	>ai	>i	>i
	ゴ <i>beitan</i>	<i>bait</i>	<i>bitum</i>	<i>bitans</i>
	(英 bite 「噛む」	bit	bit	bitten)

<sup>33</sup> ゴート語については、資料的限界のために他の語との類推から復元した語形も含まれているが、説明を簡略化するために一括して示す。以下同様。

ゲルマン語の歴史と構造 (2)

	(ド beissen	biss	bissen	gebissen)
II	ゲ e+ü	a+ü	ゼロ+u	ゼロ+u
	>eu	>au	>u	>u
	ゴ <b>i</b> udan (i<eu)	<b>-bau</b> p	<b>-bud</b> um	<b>-bud</b> ans
	(ド bieten 「提供する」	bot	boten	geboten)
III	ゲ e+L/N+C	a+L/N+C	ゼロ+L/N+C	ゼロ+L/N+C
	>e	>a	>u	>u
	ゴ <b>b</b> indan (i<e)	<b>band</b>	<b>bund</b> um	<b>bund</b> ans
	(英 bind 「巻く」	bound	bound	bound)
	(ド binden	band	banden	gebunden)
IV	ゲ e+L/N	a+L/N	ゼロ+L/N	ゼロ+L/N
	>e	>a	>u>ē (類推)	>u
	ゴ <b>ba</b> īran (aī/ε/)	<b>bar</b>	<b>bē</b> rum	<b>ba</b> ūrans (aū/ɔ/<u)
	(英 bear 「運ぶ」	bore	bore	born(e)
	(ド gebären 「生む」	gebar	gebaren	geboren)
V	ゲ e+C	a+C	ゼロ+C	ゼロ+C
	>e	>a	>ē (類推)	>e (類推)
	ゴ <b>g</b> īban (i<e)	<b>gaf</b>	<b>gē</b> bun	<b>gī</b> bans (i<e)
	(英 give 「与える」	gave	gave	given)
	(ド geben	gab	gaben	gegeben)
VI	ゲ a	ō	ō	a
	ゴ <b>f</b> aran	<b>fō</b> r	<b>fō</b> rum	<b>f</b> arans
	(ド fahren 「行く」	fuhr	fuhren	gefahren)

過去形複数と過去分詞に注目しよう。上述のように、両者の語幹母音は無アクセントのゼロ階梯に弱まった。語頭アクセントに移行するべきゲルマン祖語にとっては、重大な問題である。そこで、第 I, II 系列では「わたり音」(glide) の *ɪ/j/*, *ü/w/* が *i*, *u* という正規の母音に姿を変えてサポートし、

語幹母音の消失を補った。第Ⅲ、Ⅳ系列では流音 l/r と鼻音 m/n が母音 u を産み落とした。これは英語で kitten 「子猫」が ['kɪtən] → ['kɪtŋ], bottom 「底」が ['bɑ(:)təm] → ['bɑ(:)tm] となるのと逆の現象だと思えばいい。私たちは母音と子音はまったく別物と思いがちである。しかし、母音と子音の区別は呼気の狭めの度合いによるのであり、呼気をそれほど阻害しない母音に近い子音もある。母音的な性質を持ち、単独で音節を形成できる子音を「成節子音」(syllabic consonant) という。わたり音 i /j/, ü /w/ に加えて鳴音と呼ばれる l/r/m/n は、成節子音 l [l̩] /r̩ [r̩] /m̩ [m̩] /n̩ [n̩] となり、「ソナント」(音節主音, sonant), すなわち「音節核」(nucleus) を形成して、弱まった母音を代行したのである。第Ⅳ系列の過去分詞 u も同様である。

ところが、第Ⅴ系列では語幹母音に後続するのは、母音的な性質からほど遠い閉鎖音と摩擦音という障害音なので、弱化した母音を代行できない。そこで、第Ⅵ系列の o と a に対応する階梯の ē と e を類推によって取り入れた。ついでに、第Ⅳ系列の過去形複数も第Ⅵ系列との類推から延長階梯の ē に置き換えたい。

母音交替はじつに奥が深い。そこで、もう一言だけ加えよう。じつは、このほかに「重複動詞」(reduplicating verb) に由来する二次的な母音交替を示す第Ⅶ系列がある。これは語幹の第1音節を「重複」(reduplication) させて語頭に付加し、印欧祖語で完了形を導いた動詞である。英語やドイツ語では did (<古英 dy-de) ← do (<古英 dō-n)/tat (<古高ド te-ta) ← tun (<古高ド tuo-n) に痕跡がある。did/tat は過去形の -ed/-te を連想させる -d/-t を di-/ta- につけた語形ではない。di- (<古英 dy-)/ta- (<古高ド te-) は語幹 do (<古英 dō-)/tu- (<古高ド tuo-) を重複させ、語頭に付加したなごりで、-d (<古英 -de ← dō-)/-t (<古高ド -ta ← tuo-) がかつての語幹にあたる。

「重複」という手段はギリシャ語やサンスクリットでは規則的であり、ラテン語にも dō 「(私は) 与える」—dedi 「(私は) 与えた」などの例があるが、ゲルマン語では早い時期に衰退した。そこで、二次的な母音交替(ゲ ē<sup>2</sup> /e:/) を案出し、過去形を区別したのである。ゴート語では重複動詞の例が残って

いる。haldan 「保つ」(haí- /hε/ が重複成分) と英語の hold とドイツ語の halten を挙げてみよう。

VII	ゴ	haldan	<i>haíhald</i>	<i>haíhaldum</i>	haldans
	(英)	hold	held	held	held)
	(ド)	halten	hielt	hielten	gehalten)

haldan 「保つ」では語幹母音が母音交替しておらず、ドイツ語では ie [i:] (<古高ド ia<グ ē<sub>2</sub>>, 英語では e (<古英 ē/(ēo)<グ ē<sub>2</sub>>) が二次的な母音交替による過去形の目印になっている。第VII系列の語幹母音は雑多であり、詳述は省くが、多くは母音交替できなかった動詞で、現在語幹 (=不定詞語幹) と過去分詞語幹の母音は原則として同一である。母音交替は語形成の手段にも用いられた。第VII系列以外の強変化動詞はもともと母音交替を伴っていたので、上記の英語の to bind ↔ band/bond/bundle やドイツ語の binden 「巻く」↔ Binde 「包帯」/Band 「リボン；巻」/Bund 「同盟」のように、派生名詞が母音交替を示すことが多い。一方、第VII系列では派生名詞と語幹母音が原則として同一である。

英 hold 「保つ」(held—held) ↔ hold 「支え」

ド halten 「保つ」(hielt—gehalten) ↔ Halt 「支え」

英 fall 「落ちる」(fell—fallen) ↔ fall 「落下」

ド fallen 「落ちる」(fiel—gefallen) ↔ Fall 「落下」

ド schlafen 「眠る」(schlief—geschlafen) ↔ Schlaf 「睡眠」

## 2.7. 弱変化動詞と歯音接尾辞 — 派生動詞はこうして救済された

一方、もともと動詞ではなく、名詞・形容詞・他の動詞から派生した動詞は母音交替とは無縁だった。さて、どうするか。そこで講じた手段の解釈にはいろいろある。最も有力な説によれば、動詞の「不定形」(infinite form)の中で形容詞的語形である過去分詞を特徴づける接尾辞の中性単数対格



\**ða-* (<印欧 \**tó-*) に、意味的に最も無標、つまり一般的な「する」という意味の英語の *do* やドイツ語の *tun* にあたる \**dōnan* (<印欧 \**dʰē-/dʰē-*) の過去形 \**dēd-* を付加することだった。この過去分詞は同じ子音が続くので、\**ða+\*dēd-* は「重音脱落」(haplology) による縮約を経て、\**d(ēd)-* という「歯音接尾辞」(dental suffix) に発達した。これが動詞の語根とほぼ同形の現在語幹に付加されるように「再解釈」されて、英語の *-ed* やドイツ語の *-te* のもとになった。たとえば聖書に頻出して用例が豊富なゴート語の *salbōn* 「香油を塗る」は、名詞 *salbō* 「香油」からの派生動詞だが、その過去形 *salbōda* 「(彼は) 香油を塗った」、*salbōdēdun* 「(彼らは) 香油を塗った」は、\**salbōda deda*, \**salbōda dēdun* という分析的な形式から発達し、原義はおよそ「香油を塗られたようにした」だった。

これは日本語の「香油塗りをした」と似た原理であり、英語の *did you know?* や *I didn't know* のような「{*do/did*}+不定詞」とも通じるところがある。ドイツ語でも *Die Augen taten ihm sinken*. 「彼の目は閉じられた (= 沈んだ)」(ゲーテ) のように、*sanken* 「沈んだ」(英 *sank*) のかわりに *taten ...sinken* (英 *did sink*) ということがあり、低地ドイツ語でも「*doon*+不定詞」は「…する」の意味で頻出する。ただ、ゲルマン祖語では動詞文末が基本語順で、文法的機能を表す無アクセント要素は語頭アクセントの原則から語の右側、つまり語末に置かれる傾向が強かった。そこで、英 *did*/ド *tat* にあたる形式は形態的独立性を弱め、接尾辞となったと考えられる。

過去形で歯音接尾辞を伴う動詞はウムラウトや「割れ」を除くと語幹が無変化なので、「変化する度合いが弱い」という意味で「弱変化動詞」(weak verb) という。下位区分としては、おもに「使役動詞」(causative verb) をつくる接尾辞 *-ja-* (例。ゴ *satjan* 「置く、すわらせる」(英 *set*) < *sitan* 「すわっている」(英 *sit*)、ゴ *hailjan* 「救う」(ド *heilen*) < *hails* 「完全な」(ド *heil*, 英 *whole*)), おもに「装備動詞」(ornative verb, 「…を施す」の意味) をつくる接尾辞 *-ō-* (例。ゴ *dankōn* 「感謝する」(英 *thank*) < *dank* 「感謝」(英 *thank*)), おもに「状態動詞」(stative verb) や「起動動詞」(inchoative verb) をつくる接尾辞 *-ē-* (例。古高ド *werēn* 「続く」(ド *wāhren*) < *wesan*

「…である」(ド Wesen「存在」), altēn「古くなる」(ド veralten) < alt「古い」(ド alt, 英 old)による3種類があった。動作や状態の開始を表す自動詞の起動動詞をつくる接尾辞 -na- (例, ゴ fullnan「満ちる」< fulls「満ちた」(英 full)) を加えることもある。弱変化動詞は母音交替の衰退で「生産性」(productivity) を獲得し, 現代語の規則動詞に発達していった。

## 2.8. 動詞の変化語尾 — 英語だけに残った元祖1人称語尾 -m

ゴート語の強変化動詞第IV系列 baíran「運ぶ」を例に取って, 動詞の語形変化をまとめてみよう。

不定詞	baíran	現在分詞	baírandis	過去分詞	baúrans
能動態:	直説法		希求法		命令法
	現在	過去	現在	過去	
単数1人称	baíra	bar	baírau	bērijau	—
2人称	baíris	bart	baírais	bēreis	baír
3人称	baíriþ	bar	baírai	bēri	baíradau
双数1人称	baírōs	bēru	baíraiwa	bēreiwa	—
2人称	baírats	bēruts	baíraits	bēreits	baírats
複数1人称	baíram	bērum	baíraima	bēreima	baíram
2人称	baíriþ	bēruþ	baíraiþ	bēreiþ	baíriþ
3人称	baírand	bērun	baíraina	bēreina	baírandau
受動態:	直説法		希求法		
	現在		現在		
単数1人称	baírada		baíraidau		
2人称	baíraza		baíraizau		
3人称	baírada		baíraidau		
複数1~3人称	baíranda		baíraindau		

まず, 「希求法」(願望法, optative) という聞き慣れない用語がある。これ

は話者の願望や可能性の判断を表し、英語の仮定法やドイツ語の接続法にあたる。印欧祖語の接続法はこれから起こるべき出来事を表したが、ゲルマン語では直説法に吸収された。

受動態は *bafrada* 「(彼は) 運ばれる」のように1語で表している。これは印欧祖語の「中動態」(mediopassive)を現在形にとどめた結果である。中動態とは、動作の影響が他者に及ばずに動作主に還元されるという意味と形式を指す。印欧祖語の中動態の形式は中動態と受動態の意味を表したが、ゲルマン祖語では受動態の意味に限定され(例、ゴ *skabada* 「彼はひげをそられる」)、中動態の意味には再帰代名詞を用いた(例、ゴ *skabip sik* 「彼は自分のひげをそる」)。北ゲルマン語でもアイスランド語の *berast* 「運ばれる」のように、*bera* 「運ぶ」に *-st* (他の言語は *-s*) を添えて1語で表現する。ただし、これは再帰代名詞 *sik* (ド *sich*) を「接語」(クリティック, clitic)として動詞に添えた後代の発達による(*-st/-s < -sk < sik*)。西ゲルマン語では英語の「be+過去分詞」のように、分析的な形式になった。なお、命令法には3人称の語形もあった。

今度は語構成に注目しよう。直説法現在形 *bafr-i-p* 「(女)は運ぶ」、*bafr-and* 「(女)らは運ぶ」などから、動詞の語形は3つの要素からなることがわかる。*bafr-*のように語彙的意味の中心部分を「語根」(root)という。それに *-i/-a-*などの「語幹形成接尾辞」(ド *stammbildendes Suffix*)が付加され、語としての基本的特徴を担う「語幹」(stem)ができる。これに *-p/-nd* のような<sup>すう</sup>数や人称などの文法的特徴を表示する「語尾」(ending)がついて、語としての姿が完成する。このしくみは名詞や形容詞でも同じだった。

語：                    語幹 (= [語根+語幹形成接尾辞]) + 語尾  
*bafrip/bafrand* :            [*bafr-+i/-a-*]                    + *-p/-nd*

私たちは英語の学習経験から「語幹」と「語尾」の区別は知っているが、「語幹」と「語根」の違いにはびんとこない。語幹形成接尾辞が摩滅してしまったからである。英語の *he play-s* [z] やドイツ語の *er komm-t* [t] 「彼は来

る」にたいして、she wash-e-s [ɪz] や sie wart-e-t [ət] 「彼女は待つ」となるのは、歴史的には「口調上の理由で e をはさむ」のではない。これは語幹形成接尾辞が脱落せずに残ったことによる。詳述は省くが、baír-i-þ や baír-a-nd の -i/-a- という語幹形成接尾辞の異形態は、かつての母音交替による。

語尾については直説法で現在形と過去形で一致せず、2種類あったことがわかる。また、現在形 1 人称単数の baír-a は無語尾である。-a は語幹形成接尾辞であり、語尾ではない。これはドイツ語でも同じである。私たちは ich wart-e 「私は待つ」の -e は語尾だと習うが、歴史的には sie wart-e-t の -e と同じく語幹形成接尾辞だった。本来の語尾はどこへ行ってしまったのだろうか。じつは、英語の I am だけに残された -m がそれである。ゴート語では im 「(私は)…です」の -m がこれにあたる。ギリシャ語には 1 人称単数が「語根 + -mi」となる「mi-動詞」(例. eimí 「(私は)…です」, dídōmi 「(私は) 与える」) というクラスがある。古高ドイツ語と呼ばれるドイツ語の古語では ih wart-ēm (または wart-ēn) であり、語尾の -m (-n) が一部の動詞に保たれていた。-n は -m が弱まったもので、今では ich bin 「私は…です」の -n だけに残っている。この語尾 -n を広く保持している稀な現代語の例には、ルクセンブルク語がある (例. ル ech{*si***nn**/*hunn*/*doen*/*waarden*}, 英 I{*am*/*have*/*do*/*wait*}). スイスドイツ語でも、「動詞 + 人称代名詞」の語順では母音で始まる人称代名詞との母音連続を嫌って、「n の復活」が起こる (例. チュ ich {*bi*/*ha*/*tue*/*bäite*} ↔ {*bin*/*han*/*tuen*/*bäiten*} ich, ベ i {*bi*/*ha*/*tue*/*beite*} ↔ {*bin*/*han*/*tuen*/*beiten*} i 「同上」)。

さらに、この -m (>-n) はゴート語の 1 人称複数形 baír-a-m 「(私たちは) 運ぶ」の -m (<ゲ -m-az) とも同源である。人称代名詞 mik/mis 「私 (対格/与格)」, つまり、英語の me, ドイツ語の mich/mir の m-とも同源である。大昔は英語の am (<古英 eom) の古形だけで「私は (-m) …です」に相当し、I 「私は」 (<古英 ið) はつけ足しにすぎなかった。-m は代名詞と動詞ともに 1 人称を示す単数・複数共通のマークなのである。詳述は省くが、他の人称・<sup>すう</sup>数を含めて、動詞の語尾は代名詞が接語として語幹に付加されて誕生した。

これは上述の北ゲルマン語の -st/-s による受動態が再帰代名詞 sik を動詞

に「接語化」(cliticization)したことに似ている。ドイツ語では2人称親称単数の語尾は du kommst 「君は来る」/du wartest 「君は待つ」の -st だが、これもゴート語の baifris と共通の -s に du 「君」を接語化した結果である (wartēs du > wartēstu > warteste > wartest)。同様の変化を経たオランダ北西部の西フリジア語では, (do) komst(e)/(do) wachtest(e) 「同上」のように do 「君」はいまだに任意である。このように、本来の語や形態素の境界が異なって解釈される現象を「異分析」(metanalysis) という。異分析された語形は文法的に別の扱いを受けることがあり、弱変化動詞歯音接尾辞の場合と同様に、これを「再解釈」(reanalysis) と呼んでいる。

## 参考文献 (前回に挙げたものは除く)

- Brunner, Karl. 1965<sup>3</sup> (1942). *Altenglische Grammatik*. Tübingen. Niemeyer.
- Düwel, Klaus. 2001<sup>3</sup>. *Runenkunde*. Stuttgart/Weimar. Metzler.
- Faarlund, Hans Terje. 2008. "Ancient Nordic". in Woodard, Roger D. (ed.). *The Ancient Languages of Europe*. Cambridge et al. Cambridge University Press. 215-229.
- Frey, Evelyn. 1994. *Einführung in die historische Sprachwissenschaft des Deutschen*. Heidelberg. Groos.
- Gamkrelidze, T./Ivanov, V. 1973. „Sprachtypologie der gemeinindogermanischen Verschlüsse“. *Phonetica* 27. 150-156.
- Hawkins, John A. 1987. "Germanic Languages". in Comrie, Bernard (ed.). *The World's Major Languages*. London/Sydney. Croom Helm. 68-76.
- Hopper, P. J. 1973. "Glottalized and Murmured Occlusives in Indo-European." *Glossa* 7. 141-166.
- Krahe, Hans/Meid, Wolfgang. 1969<sup>7</sup>. *Germanische Sprachwissenschaft I, II, III*. Berlin. De Gruyter.
- Mallory, J. P./Adams, D. Q. 2006. *The Oxford Introduction to Proto-Indo-European and the Proto-Indo-European World*. Oxford et al. Oxford University Press.
- Nielsen, Hans Frede. 2000. *The Early Runic Language of Scandinavia*. Heidelberg. Winter.
- Orell, Vladimir. 2003. *A Handbook of Germanic Etymology*. Leiden/Boston. Brill.
- Schweikle, Günther. 1996<sup>4</sup>. *Germanisch-deutsche Sprachgeschichte im Überblick*. Stutt-

- gart/Weimar. Metzler.
- Van Coetsem, Frans. 1994. *The Vocalism of the Germanic Parent Language*. Heidelberg. Winter.
- Vennemann, Theo. 1984. „Hochgermanisch und Niedergermanisch. Die Verzweigungstheorie der germanisch-deutschen Lautverschiebungen“. *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*. 106. 1-45.
- Vennemann, Theo. 1985. “The Bifurcational Theory of the Germanic and German Consonant Shifts. Synopsis and Some Further Thoughts”. Fisiak, Jacek (ed.). *PAPERS from the 6<sup>th</sup> International Conference on Historical Linguistics*. Amsterdam. Benjamins. 527-547.
- Vennemann, Theo. 2010. “Contact and Prehistory: The Indo-European Northwest”. in Hickey, Raymond (ed.). *The Handbook of Language Contact*. Chichester. Wiley-Blackwell. 380-405.
- Watkins, Calvert. 1992<sup>3</sup> (1969). “Indo-European Roots” in *American Heritage Dictionary*. Boston. Houghton Mifflin.
- Wiik, Kalevi. 1997. “The Uralic and Finno-Ugric Phonetic Substratum in Proto-Germanic”. in *Linguistica Uralica*. XXXIII, No. 4. 258-280.
- ブルンナー, K. (松浪 有他訳). 1977<sup>2</sup> (1973). 『英語発達史』大修館書店.

\* 本稿は「ゲルマン語の歴史と構造 (1) — 歴史言語学と比較方法 —」(北海道大学文学研究科紀要 131. pp. 1-40. 2010) の続編である。

\* 本研究は科研費 (21520425) の助成を受けたものである。

\* 誤植訂正：前稿「ゲルマン語の歴史と構造 (1) — 歴史言語学と比較方法 —」

26 頁 本文下から 2 行目 k [tʃ] → k(j) [tʰ]

本文下から 1 行目 g [dʒ]... sk [ʃ] → g(j) [dʒ]... sk(j) [ʃ]

27 頁 上から 1 行目 k [ç], g [j] ... sk [ʃ] → k(j) [ç], g(j) [j]... sk(j) [ʃ]

上から 6 行目 kysse [ˈgʷosə] → kysse [ˈkʷosə]

上から 7 行目 gestur [ˈjɛsɖʊr] → gestur [ˈjɛsɖʏr]

上から 8 行目 kyssa [ˈtʰis:a]—gestur [ˈdʒɛstʊr]

→ kyssa [ˈtʰis:a]—gestur [ˈdʒɛsɖʊr]